

最大の慰め・復活

丸山 勉

【聖書】 コリントの信徒への手紙一 15章 20～22、50～58節

しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。

兄弟たち、わたしはこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずですよ。

【序】 コリントの信徒への手紙一の最終楽章

私たちはこの4月から、パウロが書いた「コリントの信徒への手紙一」を読み進めてきました。そこを読んで来て感じることは、人間というのは昔も今も変わらないのだな、ということです。教会の中でさえも起こる、人間の集まりの不一致、分派争い、嫉妬、正しくない男女の関係、さらには神様からの贈り物であるはずの信仰の賜物について、優劣を付けてさばいてしまうことなど、人間の持つ罪や弱さが隠されずに、明るみになっています。そのような罪を、パウロは断罪しているわけではありません。そのようなあなたがたがいつも立ち返らなければならぬのは、十字架のイエス様のみもとなのだ、ということをお話してきています。

そして、パウロは最後の16章の挨拶の部分の前のこの15章で、これまで語ってこなかった、しかし、私たち信仰者が最終的にどこに向かっていくのか、どのような終りが与えられるのか、その救いのクライマックスについて語ります。それは、交響曲の最終楽章とも言うべき、私たちの命の完成の日、復活という慰め、また、大いなる希望です。その信仰の約束の言葉を今朝、ご一緒に聞いて参りましょう。

【1】 聖書が語る「神秘」(奥義)

考えてみますと、生きると言うことは、とても不思議なことだと思います。私たちは、自分が生まれた時のことを知りません。気が付けば生まれていたのです。そして、自分の生涯がいつ終わるのかということも前もって知ることは出来ません。

つまり、自分という存在は、自分の意思を超えて始まっており、又、予測出来ない時に終わりを迎えると言える訳で、そう考えると、果たして今、この「私」という存在は、なぜここにいるのだろう、なぜ体を持って存在しているのだろう？と考えると、どうも不安な感じがしないでしょうか。とても不安に襲われるのです。

自分という存在が、足が地に着かない、何か宙ぶらりんにされた者だと思える。実は、私がまだ学生だった時に、「結局はやがては泡のように消えていく命、長く生きる意味などはないのではないか。それより、早く終わりを迎えたほうがずっと良いのではないか」という気持ちに飲み込まれそうにもなりました。

そのような時に、聖書に出会いました。聖書は人生の空しさ、はかなさを知っていました。旧約聖書の中の『伝道の書』の中には、「空の空、空の空、いっさいは空である…」と記されていました。何というニヒルかと思

ました。或いは『詩編』の90編には「わたしたちの人生の年月は七十年程のものです。健やかな人が八十年を数えても得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります。」と、命の喜びとはかけ離れた言葉が、沢山書かれてあることに気付きました。

…私は、聖書と言うのは人間が持つ信心を鼓舞するような書物かと思っていましたけれども、そうではありませんでした。とてもリアルな人間存在を見つめている書物でした。その気付きがある意味、私を聖書の奥深さに引っ張り込んでくれたように思います。

今「リアル」という言葉を使いましたが、「リアル」の最たるもの、それは「死」ではないでしょうか。どのように元気に生き、笑い、言葉を発し、生きた証しを残した者も、皆等しく最後はこの地上から消え去って行く。—「死」で終わる私のいのち、あなたのいのち、それは、ただ「虚しいもの」なのではないでしょうか。そうであれば今生きていることに何の価値、意味があるのか、と問いたくなります。

本日のコリントの信徒への手紙一の15章は、人間の「死」ということ、そしてその「死」が、実は私たちの命の終りではないのだ！という破格の告知が、確かな現実として私たちに用意されている、という驚くべきことを語っています。

パウロはここで、私たちの「復活」ということを、神の神秘として語るのですが、その時に、実はまず、私たちはそのような可能性は無かった者なのだということを語るのです。50節をお読みします。「兄弟たち、わたしはこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。」人間とは、罪ある朽ちゆく存在。とても神の国を受け継ぐ者とは言えない、とパウロは言うのです。

しかし、パウロは続く15:51で「あなた方に神秘(奥義)を告げます」と言って「わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます」と宣言します。—このパウロの確信はどこから来るのでしょうか。絶望的な50節と輝かしい51節以下の言葉。この間の変化は、人間の理屈では説明がつかないものです。

[2] 「復活」交響曲と、パウロの言葉

ちょっと話が変わるようで恐縮ですが、私がキリスト教信仰に導かれるためには、(それは二十歳を迎えようする頃でしたが)赤塚教会の中での交わりと言うことが大きかったのですが、好きだった映画やクラシック音楽の影響もあるんです。

私がもし「死ぬ前に聞いてから死にたい曲は何？」と質問をされたら、私は、G・マーラーの交響曲第二番なんです。合唱付きの曲で、「復活交響曲」として、近年とても親しまれている、一時間を優に超えるスケールの大きなシンフォニーです。

マーラーは19世紀の終りから20世紀前半にかけてドイツで活躍したユダヤ人でした。しかし後に、カトリック教会で洗礼を受けた作曲家です。彼がこの第二交響曲を作ることになったきっかけは、まだ彼が30台の時、尊敬していたハンス・フォン・ビューローという名指揮者が死に、ハンブルグの教会でなされた葬儀にマーラーも出席しました。その時、合唱団がプロクシュトックという詩人の「Auferstehung 復活」という賛歌をオルガン伴奏で歌っていました。その歌に丸で雷に打たれたような衝撃が走り、「私は天啓を得た」と言って、一気に全体の構想がはっきりと頭に示されたと言われています。

この第二交響曲の最終・第5楽章にマーラーが取り込んだプロクシュトックの「復活」という元の詩はこのように始まっています。

「蘇る そうだ おまえは蘇る。今や塵となった存在が、束の間の休息ののちに！

お前を造られたお方が、滅びることのない命をおまえに与えてくれるだろう。ハレルヤ！ ふたたび花が開くために お前は種として蒔かれたのだ。収穫の主はお前を訪ね、実りの穀物の束として集めてゆかれる。私たち死せる者たちを。ハレルヤ！」(マーラーはこの詩をまず合唱に静かに歌わせるのですが、この合唱の前には、トランペットのファンファーレを響かせています。)

「お前は種として蒔かれたのだ。ふたたび花が開くために」という一節は、この第一コリント 15:42 以下を連想させます。お読み致します。

「死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。」

私たちは、神様によってこの世へと蒔かれた種粒のようなものだと言えるのかもしれませんが、はかないもの、やがて消え失せるもの、しかし、その朽ちていくものの中には「命」が宿っていると。「朽ちる」存在でしかない私たちが「朽ちないものに復活し、輝かしいものに復活する」とパウロが語るこの言葉は、私たちの願望が作り出した「単なる希望」「空しい望み」では決してありません。「死者が復活する」という驚くべきことの根拠、それをパウロは、20 節でこのように記しています。

「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂とされました。」一面の麦畑(青い麦)が、やがて大きな収穫となって実っていく。「初穂」とは、その最初の実りの穂、「時が来れば実を結ぶ」という前ぶれ、確かな保証です。パウロはハッキリと言うのです。イエス・キリストが復活されて、私たちの、復活の「初穂」となって下さったのだ、と。

なぜこの「一人の人」の存在が、全ての者の復活の望みとなるのでしょうか。21 節にこうあります。「死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです」。…実に不思議なことです。私たちが神様との関係を回復するために、私たちは何にもしていない。自分の罪深ささえも深刻なこととして捉えられない。しかし、神様が、ご自分からその「解決」をつけて下さった！

…私たちは皆最初の人間アダムの末、末裔です。こびりつく罪から逃れられない者です。「死」は、この一人の人アダムを通して私たちの現実となった。けれど、神様は、今や、新しく一人の人、イエス・キリストというお方を通して、アダムに代わって、人間の現実をひっくり返して下さった！と言うのです。言ってみれば、完全上書き状態です。古い文書は完全に廃棄されたのです！

[3] 「必ず」の信仰と復活の体

終末の日、それはキリスト再臨の日と言えるのだと思いますが、いつなのかは分かりません。天使たちも知らないと言うのですから。けれども、その日に私たちは変えられるのです！聖書はシンボリックに、「ラッパの音と共に」とありますけれども、神のわざとしてそのことが起こると言うのです。そして次の 53 節の言葉、これは私は本当に素晴らしい！と思います。「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。」

パウロはここで「必ず」と言うのですね。これは原語ではギリシア語の「dei」という単語、英語では言えば「must(マスト)」です。必ずそうなる。いや、そうならざるを得ない、そうなるのは確実なのだ！と言っているのです。

聖書は大事な箇所での「dei」(必ず～になる)という言葉を用いています。例えばマルコ福音書 8:31。「そ

れからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥され、殺され、三日ののちに復活することになっている、と弟子たちに教え始められた」。

主イエスの十字架の死とお甦り。これは「**神様の**」ご計画なんです。だれが邪魔しようと、その計画は貫く！とおっしゃる、**神様のご決意**です。ですから、私たちが復活するというのは、イエス様が十字架に死に、そして復活されたように、**確実なこと**なのだと言うのです。そして、その主の十字架の死の出来事の中で、実は私たち人間の「死」が、もはや死ではない、キリストにあって、「**勝利**」に変えられたと告げています。54節後半からお読みします。

「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。死のとげは罪であり、罪の力は律法です。わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。」

主キリストは、全く罪のないお方、神の独り子でした。そのお方が、私たちに代わり、私たちのために、私たちの受けるべき審判とその罰を既に引き受けて下さいました。それとは逆に、キリストが元々お持ちの「**義**」と「**祝福**」を私たちに与えて下さいました。ルターは、ここに私たちの救いのために「**交換とやりとり**」が起こったのだと語ります。キリストと私の「**驚くべき交換、喜ばしき交換**」。私たちはそれを信じる事が許されている。

さて、**神様がやがて私たちに与える復活の体とは、どういうものなのでしょう**か。幽霊みたいなものか。そうではありません。聖書は別の箇所、私たちはやがてどうなるかはわからないけれども、分かっていることが一つある。それは、**キリストと似た者となる**ということだ、と言っています。キリストはこの地上で、肉体を取ってその命を歩まれました。具体的に人と出会われました。病人に触れました。人々と食事を楽しまれました。悲しみや憤りに涙を流されました。そして、肉体を傷つけられ、両手両足にくぎを打たれ、殺されるという経験を受けられました。

その主の復活された後のお体は、全く傷一つない幽霊のような存在だったのでしょうか？いいえ。弟子たちに現れて下さった主のお体には、その両手には、釘の痕が、わき腹には傷痕が残されていました。これは、キリストが確かにこの地上の歩みを人となって歩み、十字架で私たちの救いを成し遂げて下さった証しそのものです。私たちも、きっと同じなのです。復活の体には、他の誰でもない、**私が私という人間であることの証しがきつ**とあるのだと思います。これは慰めだと思います。

カトリック教会の岩島忠彦神父(上智大学名誉教授)は、「からだの甦り」の信仰について、こう語られています。「そのような体の復活への信仰こそ、キリスト者を奮い立たせ、喜びと希望で満たすものなのです。私たちが目を持って見、頭を持って考え、手を持って働き、心臓の鼓動を持って苦しみ、あるいは愛したこと—この地上での命の営みで無駄となり消え去ってしまうものは何一つなく、全てが完成され、現在化する。体の復活はそう教えているのです」。

[結] 復活の希望と慰めに支えられて

先ほどマーラーの復活交響曲のことを言いました。その音楽に私がとても心を捉えられるのは、先のプロクシウトックの「**復活の賛歌**」の後に、**マーラー自身が書き加えたという詩**が初めは静かに、そしてその後合唱が高揚しながら歌われるのですが、それが本当に素晴らしいのです！まずアルト、そしてソプラノが、こう歌います。

「おお、信ぜよ、わが心よ、信ぜよ。お前は一つ失いはしないのだ。お前のものなのだ。お前が憧れ求めてきたものすべて、お前が愛し、お前が戦ったものはすべておまえのものだ。おお、信ぜよ、お前はけっして無駄に生まれてきたのではない！無駄に生き、無駄に苦しんだのではない。」

そして、合唱が加わってこう歌うのです。

「生まれ出たものは、やがて消えなければならない。しかし消え去ったものは、ふたたび甦るのだ！おのき震えるのをやめよ！生きるための備えをせよ！」

クライマックスはこうです。

「おお死よ、すべてを征服するものよ、今やお前が征服させられるのだ！熱い愛の葛藤の中で勝ち取った翼をひろげて、私は空を駆け抜けるだろう。まだいかなる目も見たことのない光のもとへと。甦る、そう、甦るのだ。わが心よ、一瞬の内に。お前がこの世に生きたしるしのすべてが、お前を神の御許へと運んでいくのだ！」

…最後のドイツ語の zu Gott、zu Gott、zu Gott と上昇しながら、三度繰り返されるこの迫力あるコーラスは本当に心震えるものです。

そうです。私たちの地上のすべての歩みは、空しく消えゆくものには有りません！聖書は「私たちの労苦が無駄になることなない！」と言っています。計画通りにいかないことが多い人生です。思わぬ挫折もあります。病気にも見舞われます。苦しい日々の中を通らされることもあると思います。けれども、それらの日々を主が共に担っていて下さいます。「主にあっては」あなた方の苦労は無駄になることはない。もう私たちの中には、キリストの命、永遠の命が芽生え始めているのですから！

キリスト教信仰とは、キリストに起こったことがやがて私のこの身にも起こることを信じる信仰です。キリストは私たちに先んじて死んで下さいました。私たちもやがてそれに合わせられます。そしてキリストは私たちに先んじて甦って下さいました。私たちもその復活の姿を自分の命とさせて頂くのです。最大の慰めではないでしょうか？私たちのこの地上の命は空しくないのです。そうであるならば、やがて迎える終わりの日まで、キリストの日まで、日常を大切に生きて生きたいと思えます。自分を愛し、隣人を愛し、与えられた馳せ場の中、＜労苦＞をしていきましょう。神様を賛美しながら！

お祈りを致します。

主なる神様、あなたの御名を賛美致します。

私たちは、あなたから地上に蒔かれた種のような存在です。ちっぽけで、すぐに消えうせてしまうようなはかなさを時に感じます。

しかし、私たちは同時に知っています。種は、蒔かれることによって、やがてその姿を全く変えることを。そこに命が確かにあるからです。今、私たちにはそれは隠されているのだと思います。どうか、私たちの命が決して朽ちる空しいものではなく、永遠のいのちに甦る、神様のいのちに繋がっているものであることを強く信じさせてください。

「あなた方の命はキリストと共に、神の内に隠されているのです」。

ありがとうございます！このキリストに捕えられて、担われて、慰められ、生きていくことが出来ますように。

特に今、病院で静養されている兄弟姉妹の上に、また、ベットの下から、十字架と復活の主の臨在が確かにございますように！

救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン。